

---

# 死を夢見て生きる少年 ～命＋ゲーム＝X X～

野乃。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死を夢見て生きる少年 ｝命+ゲームⅡXX｝

### 【Nコード】

N7420M

### 【作者名】

野乃。

### 【あらすじ】

今のところ、特にありません。

## ゲームのはじまり 1

それほど新しくない、築15年くらいのマンションの一室に僕はいた。この部屋の住人なのだからおかしいわけではないのだけど、他の階の人も集まっているっていうのは結構おかしいと思ってしまっただけ。そんなに人恋しいのかね、みんな。いや、分かってるけど何でみんなが集まるのか、さ。

「結局、誰がこんな事をしたかって話なんだよ」

当たり前の事をさも自分でなければこの場をきれないということとを暗示するように切り出したのは中年になりかけの403号室の向井さん。みんな分かっているのにね改めていう必要はないんですよ。ぶづつ。

「おい、何がおかしいんだ？」

おっと、この状況でそれはまずいですよ向井さん。空気も読めないんですかダメダメですね。しかしまずい。僕も要注意人物に入っているというのにこれ以上支持率があがってしまったては困る。だから、

「いえ、昨日のテレビ番組がおもしろかったもので、つい」

ふう、これで支持率は。

「この状況で思い出し笑いか。やっぱイかれてんじゃないのか、アンタ」

上昇すんのかよ、選挙に出ればすごかっただろうね。「無名の高校生政治に新たな風を起こす」みたいな。あー、てか高校生っていつちゃってるじゃん。無駄な事に脳みそ使っちゃった。全部向井のせいだ。

「……ともかく、みんながこうしていれば犯人も手がだせないはず」

これは501号室の鳴海さん。かっこいいよ？20代前半の大学生だぜ服装はパツとしないけどね！

「でも……この中に、犯人が……いるっていうことは、確実にやない……？」305号室の……神田さん、だっけかな。ついさつき自己紹介がみんな終わったばかりだから、覚えているつもりなんだけど。単に僕が激しいボケにかかっているのか、彼女の影が薄いだけか……。うーん、いい勝負ですなあ。

「そうだ！こんなかに犯人いんのは確実だろうが。逃げ場を無くして 人を殺してるようなやつだぞ？冷静でも、やってることは普通じゃね え！そんなやつが消防隊が駆けつけてきそうになったとき何するかわ かったもんじゃねえだろうが！」めんどいけど、この元気ハツラツ子 供を泣かせるために生まれてきたと言われても違和感のないヤンキー くんは401号室の佐藤さん。うん、第一印象でここまで解析すると は我ながら怖いね、自分が。

さて、「人殺し」なんてこわい言葉が出てきたから整理しようか。このマンションで起こった二度と味わえない殺人<sup>ゲーム</sup>事件をさ。

時刻は夜八時過ぎくらい。三階に住んでいた広瀬さんが階段を登って4階に住んでいる向井の部屋の扉を叩いた（らしい）。インターホンがあるのにわざわざ手を痛めつけたのはそれだけテンパってた、ってことなんだろう。いやいや出てきた向井に事情を説明しているとのつろのろという効果音が似合いそうな足取りで神田さんが4階に到着。本人は三階にいても平気だったのに広瀬さんに無理矢理つれてきたんでしょうね、お気の毒に。

広瀬さんと向井の二人は他の階の（五階までしかないのだから最後の階）人に今の状況を伝えた。2階が燃えている、と。そんな事を言われれば119番に電話するという良い子のお約束を決行するいい機会だったのだが、みんな携帯をもっていないく、家に住み

着いている電話機もやる気を失ったように無言を貫き通すという事態に、結局は誰かの部屋に集まろう、という話が勝手にでていた。そこで一番何もない部屋（綺麗な部屋といってほしいものだ）である僕の部屋にみんな集まった。このマンションの一室はとても広く3LDKもあり、高校生の一人暮らしにはもったいない広さである。しかしながらいつも一人で悠々と暮らしている僕からすれば部屋に6人もいるというのはすごい不快に感じる。なんかこう、近くに虫がとんでいるような、そんな気分。とにかく不快であって、利益が無い。こんな状況でなければ彼らは僕に関わろうとは思わなかっただろうし、僕もできるだけ関わりたくなかった。マンション内での集まりなんてのは「スライムを延々と狩らないといけないので」という理由で今まで断ってきた。勇者の鏡だろ？。集会が終わるまでやるっていうのはたいへんだぞ？手に入った経験値が僕の心に毎回疲労感を与える。割合は1：9だけど。そんな人間関係構築機能がぶち壊れている僕の部屋へ来ているというのにみな一斉に作業に取り掛かった。無理矢理つれてこられたのは一人ではなかったらしい。

え？リアルタイム進行の方が読みやすい？しょうがないなあ。

テレビをみたりタバコを吸ったりジュースを飲んだり、みんな他人の部屋でよくそこまでくつろげるな、と思いながらも広瀬さん（本人がそう名乗った）に2階が燃えていた、という事について聞いてみる。

「あの、2階が燃えてたって」「おい、2階が燃えてたってどういうことだ？なんだかよくわからんままついてきたが……。ここにいるみんなも気になっていと思うんだ。詳しくおしえてくれ」華麗な進行を開始しようとしたところ隣からゴキブリ、もとい中

年なおっさんがでてきた。おいおい、その年で主人公志望ですか？書類審査で落ちますよ？僕は面接さえなければ突破できますけどね。僕のことなどなかったかのようにおっさん向けて話をし始める広瀬さん。好感度の違いかな？20代後半の人にフラグをたてようなんて思わなかったからな。というか、こんな人いたんだね。あ、彼女からはタオルをもらったかな？引越してきたときに。

「ええ。私は買い物に行こうとしていたんです。小腹が減ったのと明日の朝食の事を考えて。それで階段を使って降りたんですけど、一段一段降りるごとに熱くなって……。それで踊り場から2階を見てみる。と目の前が真っ赤になって！10秒ぐらいしてから火事だつて気づいて急いで電話しようとしたの。部屋に戻って電話をかけようとしたら反応がなくて！とにかく、とどまっているのか怖くて、神田さんの家に事情を説明して、それから向井さんのところへ行つて」

それで今にいたるらしい。「そうかそうか」と言つて今でも少しパニックつてる広瀬さんをなだめているおじさんが視界にはびこっているけれど、あんたもあと少ししたらパニックになるんだろうね。自分にもマンションを出る事ができないという事柄が当てはまるという事実気づいてさ。

## ゲームのはじまり 2

唐突にジュースを飲み終えて帰ってきた大学生風の人が会話に参加したがってきた。仲間になりたそうな目でこちらを見ている。どうしますか？……いれな

「すみません。俺ここに集まってる人の名前半分もしらなくて……。一つの場所にせっかくあつまってたんですから、みなさんで自己紹介しませんか？」

ほほう、俺の承諾なしに会話に加わってくるとは。まあそのことは水に流そうではないか。高校生相手に敬語を使ってくるところをみると、俺のすごさに気づいたんだね？見る目あるよ君

「そんな事……いや、名前がわかったほうが都合がいいかもしれないな。なんせ一度も顔を会わせたことのないようなやつがいるくらいだ」

まあわかってたけどね。大体僕はさっきの会話に参加してなかったんだから、主導権はおっさんがにぎっているし。しかし、この人達って一般人が多いな。手順が常識すぎる。人間としての軸がぶれてるのは3人かな。え、十分多いって？またまたご冗談を。そんなことを考えてるうちに初めてのクラスでの自己紹介的な雰囲気の中におっさんから名乗り始めた。

「俺の名前は向井隆。403号室に住んでいる。えーと、他にどんなことはなせばいいんだ？必要なことだけはなせばいいんならこれだけで十分か。ともかく、よろしく」

仲良しになるつもりはないんだよ。「2階が燃えていた」という証言があるからこれは犯罪だ。普通に考えれば見知らぬ人か1階か2階の人の犯行だろう。3階以降に住んでいる人はここに集まった6人しかいないのだから。それなら、これは簡単に幕が引いてしまう。これ以上人が死ぬことはない。普通ならば、だが。もし犯人が三階以降に残っていて僕たちを殺そうとしているのなら。広い密室

といえるだろう。でもね、一番性質が悪いのはこの中に犯人がいるということだ。

「私は、302号室に住んでいる広瀬佐鳥です。よ、よろしくお願いします?」

まだテンパりが残ってるね。これが普通の人だ。起こった事態に対応するのが遅い。悪い意味じゃなくて異常に馴染むことに拒絶できる人間合格な人だってこと。

「ちつ……。401号室の佐藤だ。俺はこの中に犯人がいると思ってるんだ。だから必要以上に俺に触れるな、話しかけるな!こんなところで死ぬなんてまっぴらなんだよ!」

向井さんの怒りポイントが10上がった。思ってた通り短気なようだ。ここに犯人がいる可能性があるから俺を巻き込むな、ってとこかな。もう巻き込まれてるんだけどね、この狂った犯罪にさ。ここまでが常識のある人、かな?ここからがブレ人(人間としての軸がぶれている人)だね。

「……305号室の……神田、伊里奈、です……。テレビ観ても、いいでしょうか……」

ヒューー! 吹けない口笛で感嘆の意を表してみる。……向井さんに睨まれた。自重しなきゃ。さて、順番からすると僕かな。隣に立っていた大学生さんと目が合うとニツコリと微笑んできた。どうやら譲ってくれるらしい、いい人だなあ。ホント、いろんなところが僕といい勝負な人なんだろうな、この人は。神田さんにいいですよ、とこの部屋の住人は自分であることを主張してから自己紹介をする。

「505号室、あ!ここでしたね、すみません。(さらにアピール)改めましてこの部屋の住人の中野劣(れつ)です。今後ともごひいきにしてくださいますよう心からお願い申し上げます」

はっはっは。どうだい、大手メーカーに勤めても恥じない自己紹介だっただろう。ここまでハードルをあげれば大学生さんも張り合おうとは思わないだろう。

「501号室に住んでいる鳴海楓(かえで)といいます。文武両道、眉目秀



麗、その他数々の褒め言葉は自分の為にあると自負しております。最近日本にきたばかりなので日本語が少しおかしいかもしれませんが、なかなかよくしてやってく下さい」

僕の想像の右斜め上をいく自己紹介だなあ。お、向井さんの顔が僕のあたりからおかしくなっていたけど、ついにカルチャーショックでもうけたのでしょうか？顔を手の中にかくしていらつしやる。「まともなやつはおらんのか」と聞こえた気がしたが、気のせい気のせい。となりですこし広瀬さんが不機嫌になっているのも気のせいでしょう。

手を顔から離し、僕のお気に入りのいすから立ち上がった向井さんはなにか言おうとした、その時

「あ……。番組、終わっちゃった……。？でも、まだ、8時30分……。おかしいわ……」

そういいながら首を傾げる神田さんに僕は声をかけてあげたかった。異常な人間に属しているくせに異常な事態に巻き込まれていることがわかっていない。それが異常なのかもしれないけど。ともかく、僕はみんなにも聞こえる声でこういった。

「ゲーム開催の挨拶でも、するんじゃないんですかね。テレビを使って」

ばっ、っと話を遮られてイライラしている向井さんとそれに耳を傾けようとした広瀬さん、そして他二名の顔も僕を見てからテレビに向けられる。十秒もしないうちに僕の予言は現実のものとなった。どうだ、ノストラダムスよ。僕のほうが優秀な預言者だろ？規模は違えどどちらも人の命がかかっているんだしさ。

さっきまで暗かったテレビに明かりが灯る。音が聞こえるし、画面も少し動いていることから動画かな？テレビのまん前に座っている神田さんは「さっきのじゃ、ない……」っていつていることからまだ僕の読みはずれていない。にしても、暗いな。あ、人が居る。手と足と腹部を縄で結ばれて目と口にも布みたいなのが巻かれている。なにこれ？っと思つているときに「佐々木……さん？」と広瀬

さんが呟いていた。ああ、そうか。これは前置きなんだね。このマシヨンの住人で生き残っているのは僕らしかないということと、ゲームにもう参加しているのだという二つの確認。彼はゲームに負けた。だからこれから死ぬ。そういうことなんだろう。しかしその映像で、衝撃的なものを僕らは見た。壁に寄りかかってにやけていた鳴海さんも体が前かがみになった。

拘束されていた佐々木M男さんの体がなんの前触れもなく燃え始めたのだ。燃える瞬間、佐々木さんには何が見えたのだろうか。僕らにはわからない。少なくとも、映像にうつっていないので、何ともいえないのだが、

「いきなり体が燃えるなんて不思議だね。こんな素敵体験をすることができる幸せ者がこの中にもいるんじゃないのかな。いや、もっと素敵なのだったりして」

「やめろ！」

鳴海さんの未来へ寄せる期待のお話を遮ったのは未来を自分で変えることなどできないと諦めたことがありそうな向井さんだった。

「すみません」

言葉だけは謝っているが、顔はにやけたままだ。

「なんだ、これ……。おい！どうなってるんだよ、これはよおお！

誰だ！？こんなふざけたことしてんのは！出て来い、ぶっ殺してやる！」

息巻いてるとこ悪いけど、黙っててくれないかな、佐藤さん。僕も今、浸りたいんだよ、異常な殺人ゲームの幕開けの余韻にさ。

しかし、テレビの向こう側の犯人さんはまってくれない。いや、テレビの向かい側、かな？この中に犯人がいる可能性はだいぶあがつたし。よく、僕の部屋で放送できたよね。集まること知っていたのかね。

テレビの中に映ったのはいやに精巧な人形だった。顔にはなにもないのだが、腕や手、足といった部分が人間としか思えない。どう

みても大きさも違うし服もきていない。顔もなければ男女の区別もつけない。なのに、なににみなこう思ったんじゃないのかな。あれ？これ、自分そっくりだ、って。

その人形を通して聞こえてくる声は、犯罪に使うようなくぐもった声で（まさに今が最大活用ですね）ゲーム開始が伝えられた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7420m/>

---

死を夢見て生きる少年 ～命+ゲーム=XX～

2010年10月28日08時00分発行